


里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	里地里山の現状把握とモニタリングの推進
手法名	生き物(ギフチョウ)を指標にした里地里山の環境把握
主体	広島大学
背景(地域の課題)	開発による里地里山の地形や景観の変化、人々の生活様式の変化は、生き物の生息域や行動様式に大きな影響を与えている。 身近な生き物を指標にして里地里山の状況を把握・評価し、保全方策の検討に活用できる可能性がある。
手法/方策の詳細	ギフチョウは、一般に里地里山地域の渓谷から尾根の林縁部で生息している。ウマノスズクサ科カンアオイを食草としており、都市圏近傍の里地里山にも生息していたが、70年代に急激に減少していった。 1)ギフチョウの分布域(図) 水系に沿ってまとまったクラスター(生息個体群)を作って分布している。変化しやすい入り組んだ渓谷の林縁部にまとまりのある行動圏を形成している。 2)行動様式 個体ごとに観察すると、飛び去ってもまた戻ってくるという特性が見られる。ループ型の飛翔行動をとり、山頂間の移動も行っている。メスはオスと遭遇できないものが山頂に集まる習性をもっている。このようにして散逸を防ぎ、交尾効率を上げていると考えられる。 3)減少の原因 落ち葉かきや柴刈が行われなくなったことで食草であるカンアオイが減少したこと、開発による地形景観の変化が減少の主な原因であると考えられる。
手法・技術的視点	里地里山の環境評価において、生物指標を取り入れることで、地形景観、植物、人との関わりがどのように影響するかを実証的に把握できる。対象とする里地里山の特性に合わせてギフチョウ以外の生き物も指標とすることが可能である。
 <p>○:ミヤコアオイ、●:サルヨウアオイ 約150プロット ①唐沢健司、青山幹男(1984) 約50プロット ②山平方知子、榎山智(1987) 約50プロット ③渡辺一雄(1983~) 約50プロット メッシュはギフチョウの推定生息域(渡辺, 2008より)</p>	
<p>図 広島県におけるギフチョウのクラスター状生息域(渡辺一雄原図)</p>	
参考資料	里なび研修会in広島 広島大学名誉教授 渡辺一雄 抜刷:「京都を取り囲むギフチョウー採集記録から生息域を考える」(月刊むし(470)26-36, 2010(April)) 抜刷:「中国地方におけるギフチョウー分布図および分布論」(星崎グリーン財団研究報告第4号225-237頁 2000年12月)